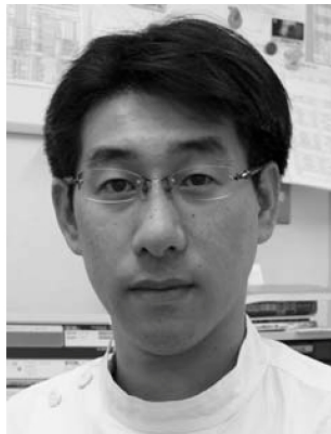


へモフィルスインフルエンザ菌 (Hibヒブ)ワクチン



小児科部長
山田 博

山香病院だより vol.32

今回は、2008年12月19日より新しく導入されたワクチンについて説明します。

へモフィルスインフルエンザ菌は現在話題になっているインフルエンザウイルスとは全く異なる細菌です。以前いわゆるインフルエンザの原因病原体として疑われたためにこの名前になっているだけです。へモフィルスインフルエンザ菌は莢膜の有無により莢膜型と無莢膜型とに分けられ、莢膜型はさらにa、fの6種類に分類されています。莢膜型は人の免疫細胞に抵抗を示すため、特に5歳未満の小児において重篤な感染を引き起こし、そしてその原因のほとんどが「type b型」であ

ることが分かっています。

このへモフィルスインフルエンザ菌(Haemophilus influenzae)の莢膜型type b型のことを頭文字をとってHib(ヒブ)と呼んでいます。今回導入されたワクチンはこの細菌に対するワクチンになるわけです。

Hib感染の代表は髄膜炎ですが、これは脳や脊髄を包んでいる膜に感染が進行し生じるもので、発熱、嘔吐、頭痛、けいれんなどからはじまり、生命にかかわる病気です。小児の細菌性髄膜炎の約60%がHibによるもので、全国で年間600人の小児がHibによる髄膜炎になっていきます。その症状は初期にはかぜや胃

腸炎と区別がつきにくく、しかし急激に増悪するため診断や治療が遅れることも多くみられています。

Hibワクチンはすでに百力国以上で使用されており比較的安全な予防接種と判断されています。望ましい接種スケジュールは、初回免疫として生後2カ月から7カ月になるまでに接種を開始し、4〜8週間間隔で3回、追加免疫として3回目の接種から約1年後に1回の計4回接種です。ただしすでに7カ月を過ぎた小児に対しては、7カ月以上12カ月未満の小児には初回免疫として2回、追加免疫として1回の接種、1歳以上5歳未満の小児には初回免疫として1回のみの接種となります。残念ながらHibワクチンは任意接種で自費で受けることになっています。また予約が多く製造が間に合わない状況でワクチンが手に入るのに1〜2カ月かかっています。しかしHib髄膜炎になった場合のリスクを考えるとぜひ接種をおこなっていただきたい予防接種であることは間違いありませんので、ご希望の方は当科にお問い合わせ下さい。